

# 令和 2 年秋、“幻の大滝”を観る

——探索ルート赤岩道(駅)・炭焼用山道(炭窯)、不動滝をも含めて報告——

大滝会 会長 齋藤正美

大滝会 理事 鹿摩貞男

(特別会員、文責・写真)

旧大滝集落の大滝地区を横断している大滝川は、集落の南側から流れてきて「小川<sup>おがわ</sup>」(河川名)へ合流している。「小川」は、集落に沿ってほぼ東西に縦断流下している阿武隈川水系の 1 級河川摺上川<sup>すりかみがわ</sup>の右支川<sup>みぎしせん</sup>である。

その大滝川の合流点から 2 km ほど上流の右側に支流の不動沢があり、大滝集落の名前の由来になったと伝えられる“大滝”がその上流山奥に存在するという。山は深く訪れ人も滅多にいないことからその“大滝”を目にする機会も少なく誰とはなしに“幻の大滝”と呼ぶようになったようである。

この度、その“幻の大滝”を訪れてきたので、途中の不動滝や今回の探索ルートである赤岩道(奥羽本線赤岩駅を含む)、炭焼用作業通路である山道(仮称不動沢参道)等についても報告し、かつての炭焼き状況についても参考までに若干紹介していきたい。

## はじめに

“幻の大滝”が存在するという事は、大滝会の皆様のお話しや『わが大滝の記録』(大滝会)でかねて承知していた。一度は観たいと思っていたが、秋も深まる令和 2 年 10 月 27 日、大滝会 齋藤正美会長の案内で“幻の大滝”(※注)をようやく訪れることができたものである。

(※注：幻の大滝の表示は、大滝地区名と紛らわしいのでダブル引用符“”を用いて、“幻の大滝”或いは単に“大滝”と表示し、今回探索の目的地の「大滝」であることを示す。)

この“幻の大滝”の探索(約 6.0 キロメートル)は、旧大滝集落通称「曲り角」<sup>あかいわみち</sup>の赤岩道の起点付近に車を置きそこから徒歩で出発し、大滝川と不動沢との合流点の字古屋敷<sup>ふるやしき</sup>の少し手前(水神様)からは、その赤岩道から分かれて不動沢沿いの山道不動沢参道(仮称)に入り、まず不動滝(大滝不動尊)を目指す。不動滝からは、今や道なき道となっているかつての炭焼用の作業用通路の山道(或いは森林管理局森林歩道か)となるが、大部分は不動沢の中を進み“幻の大滝”に至ったものである。

探索ルートの一部である赤岩道はこの後分岐点からは、大平集落<sup>おおだいら</sup>を經由して奥羽本線赤岩駅に至るものであるが、その分岐点(古屋敷)から大平まではほとんど失われているようである。

ところで木炭の生産は、かつて大滝集落の主要な生業<sup>なりわい</sup>の一つであり、今回の探索ルートの不動沢筋でも昭和 30 年代には盛んにおこなわれていて、この度の探索ルートは生産した木炭の搬出路にもなっていたという。また、この山道は、大滝不動尊への参詣<sup>さんげい</sup>道路にもなっている。赤岩道は参詣道路・木炭搬出路を兼ねながら、奥羽本線赤岩駅に通ずる文字通りの「生活道路」にもなっていた大変重要な道路であった。

従って本稿では、最初にこれらの探索ルートの概要を大滝集落との関連を含めて述べ、次に

探索状況について記すものである。巻末には「**“幻の大滝”探索関連図**」（当該図中の各小字位置は福島県歴史資料館所蔵【中野村役場文書】〔中野村全図〕に基づく）を添付したので参考にされたい。

なお、本稿で示している時間・距離は正確なものではなく当たらずとも遠からず程度と認識されたい。携帯電話距離計による簡易な測定によるものであり、途中行きつ戻りつしながらかつ蛇行して進んでおり、それらが全て含まれた距離となっている。これとて正確なものではないけれども、1万分の1の地形図を用いたスケールアップでは、“大滝”まで5km強程度である（携帯電話距離計結果は約6.0km）。時間も同様で、途中の道草や休憩時間をも含めての表記である。

掲載写真は、筆者撮影分は隅付き括弧【写真－○】で示し当日（10月27日）のものは撮影月日を原則省略している（当日以外は撮影年月日記載）。筆者撮影以外は亀甲括弧【参考写真－○】で示した。

## 第1. 探索ルートと“幻の大滝”の概要（赤岩道と不動沢参道〔木炭運搬路〕）

### 1. 赤岩道（「大滝・曲り角」～古屋敷（水神様手前）～大平～赤岩駅）について

今回探索ルートの起点は赤岩道である。赤岩道と通称される旧大滝集落から赤岩駅（奥羽本線）まで通ずる徒歩道がかつてあった。現在は、古屋敷付近までは林道化され（※注）、それより先の旧大笹生村大平集落までは廃道（途中道路跡もほとんど消滅）となっている。今回の探索ルートとしての赤岩道は古屋敷手前までである（約1.5km）。まずこの赤岩道について記すけれども、経緯があるので若干長くなる。

なお、古屋敷からは、徒歩道の赤岩道とは別に大滝川沿いに歩道があったと思われる。現在は、林道として現況の赤岩道に続く形で伸びているがその先の状況については確認していない。

#### ※注 林道・歩道

林道は道路法上の道路（高速自動車国道・一般国道・県道・市道等）以外の道路で規模や機能により多種多様である。大雑把にいうと林道とは、林野庁の「林道規定」によると森林内に設けられる道路であって、軽自動車以上が通行できる総幅員1.8m以上の道路（単線軌条含む）をいうようである。林道の管理者は、国有林は森林管理署長（局長）、民有林は地方公共団体、森林組合等の長となっていて、例えば「烏川林道」というような名称が付されている。この他森林整備を継続的にこなす幅員2.5～3.0mで重機が移動できる森林作業道がある（森林作業道作設指針）。

また、森林管理署（局）で設定している歩道（いわゆる山径）があり、例えば「葡萄沢線」と名称が付されている。

さて、赤岩道が造られたのは昭和7年で経緯は次の通りである。【参考写真1-1～2】

昭和初期、金融恐慌（昭和2年、不況のあおりを受け金融機関の破産等が相次ぎ恐慌が発生）や世界大恐慌（1929年〔昭和4年〕）によって日本経済は大不況に陥り失業者の増大など深刻な



社会状況となった。山村の大滝集落もその影響をまともに受け、生業とする木炭や繭の価格が暴落したことにより、生活苦と借財の苦しみは深刻なもので税金も滞納となり集落住民の疲労困憊のありさまは言語に絶するものがあったという（『わが大滝の記録』PDF版）。

#### 【参考写真1-1】

大滝地区、昭和40年代前半（新国道13号開通〔S41.5〕以降。真ん中旧国道13号（万世大路）通称「曲り角」付近、大滝橋（大滝川）が見える。左側赤岩道（林道化以降）入口。大きな赤い屋根は大滝分校。

大滝会 榎木新吉様提供。



【参考写真 1-2】

昭和 7 年 8 月の大滝地区(赤岩道は同年 9 月着工)。  
左下が大滝橋(大滝川)。  
堀江繁太郎筆。  
福島県立図書館蔵(「堀江画帖折本(御駐蹕之蹟 他)」)

この厳しい社会状況の中で赤岩道は、大滝集落から奥羽本線赤岩駅まで人が通れる道路として(約 4km)失業対策土木事業により昭和 7 年に設置されたようである(もっとも古屋敷までは、大滝不動尊への参詣道路としてもともと小径があったと思われる。後述参照)。『わが大滝の記録』(PDF 版、23 頁)には次のように記されている。

「昭和 7 年 9 月、救済事業とし 3600 円の予算で救済事業が始められ男 21 人、女 29 人が出て生活資金を得た。この救済事業は奥羽線赤岩駅に通ずる道路(赤岩道)開鑿工事として始められたもので、道路起点となった工事跡が、今でも、その面影を残している。赤岩道は開通当時は救済道と呼ばれた。」

【写真 1-1】



【写真 1-1】

赤岩道起点付近。大滝川右支川首尾戸沢に架かる徒歩道旧赤岩道橋梁遺構、上流側から望む。右岸橋台玉石張(空)、左岸橋台崩壊。正面は林道化した現赤岩道、橋梁は暗渠(コルゲートパイプ)に変更されている。H241224

すなわち赤岩道の開削は、昭和 7 年から昭和 9 年にかけて実施された時局匡救事業(※注)の失業対策土木事業の一環としておこなわれたものであろう。内務省所管ではなく農林省所管事業であったと思われる(実施は福島県であろう)。引き続き昭和 8 年 4 月から昭和 12 年 3 月までの 4 ヶ年にわたっては、万世大路(旧 5 号国道、のち 13 号)の改修工事(昭和の大改修)が内務省の直営工事としておこなわれ、大滝住民の多くの方が従事したという。これらにより生活資金を確保し集落の税金滞納を一掃、困窮から脱出、生活再建を成し遂げたということである(『前掲書』)。大滝住民の中には、葭沢在住の佐藤武雄氏(のち大滝分校教員)のように内務省の委託を受けて賃金支払いの責任者を務めた方もおられる。【参考写真 1-3】

※注 時局匡救事業(じきょくきょうきゅうじぎょう)

昭和初期の金融恐慌・世界恐慌などをうけて、昭和 7~9 年に全国で展開された不況対策事業で、内務省と農林省所管の土木事業が中心であった。いわゆる高橋財政(高橋是清大蔵大臣)の 2 本柱は、不況対策としての時局匡救事業費と、満州事変費を中心とする軍事費の膨張であった。高橋財政は功を奏し、日本経済は世界に先駆けて不況から脱出することができたという。高橋是清(1854~1936)は、旧仙台藩士で内閣総理大臣、大蔵大臣(6 回)を務めた。後に膨張する軍事費の縮小を図ったため軍部の恨みを買って昭和 11 年(1936)、二・二六事件で暗殺される。(『日本の歴史 24 ファシズムへの道』[大内 力 2006 年 8 月 25 日] 等)

**【参考写真 1-3】**

昭和 9 年、二ツ小屋御駐輦記念碑(鳳駕駐蹕之蹟)移転記念写真。後列右から 3 人目が大滝葭沢在住の佐藤武雄氏、当時内務省委託作業員賃金支払責任者(のち大滝分校教員)。

他、当時の内務省職員、小使いさんと呼ばれる少年の職員もいたという。

左上の坑門は、二ツ小屋隧道福島側。

(カラー化)



のちにこの赤岩道は前記引用にある通り、大滝集落では救済道と通称され(大滝会榎木新吉様談)、大滝集落住民により維持管理整備がおこなわれた。

「大滝・赤岩間の約4kmの山道は当時街へ出る最も近い道路で、よく利用されていた。

この山道は、細い道で草が繁と雨の日は交通至難なところなので、青年たちが草刈りを奉仕してみんなから感謝された。また、大滝不動さまの参詣の通路でもあったので道標を立て、峠には丸木の腰掛けを備え、谷間の清水に金明水、銀明水などの立札を立て、小川の丸木橋を補修して山道の整備をはかり多くの参詣者の便利をはかった。」

と『わが大滝の記録』(PDF 版 29 頁)に記されている。 後掲【写真 3-3】参照

赤岩道は前記のように幅の狭い徒歩道であったけれども、その時期は詳らかではないが昭和 40 年前後には車両が通れる道路に改修され林道化されているようである(古屋敷付近まで)。確認していないが赤岩道は現在「林道」扱い(道路法上の道路ではない)になっていて福島市管理となっているのではなかろうか。因みに赤岩道の起点となる旧万世大路(旧国道 13 号)は、現在福島市管理の「市道長老沢線」となっている。

ところで、赤岩道のその後について、大滝会 HP(管理人紺野文英氏)に次のような説明がある。参考までに紹介しておきたい。

「この大滝⇄赤岩道は、大滝から福島へ出る最短の大滝居住者にとっては大切な生活道路として、大滝木炭組合がトラックを所有し、さらに万世大路を福島交通のバスが飯坂温泉へ一日二往復運行されるようになる昭和 30 年代前半まで利用されていました。そして国道 13 号バイパス道路が整備されると、大滝ではバイクを所有する家が増え全く利用されることがなくなり現在に至っています。」(大滝会

HP「大滝⇄赤岩道探索」(2009-11-26))



**【写真 1-2】** 通称「曲り角」付近から福島側を望む。

正面奥が木炭倉庫跡、右側は赤岩道起点(入口)R020428

なお、前記の通り大滝では昭和 9 年頃には不況から脱出し生活再建を成し遂げているが、その時期には赤岩道入口付近の福島側葭沢地区に木炭倉庫を新築している(木炭倉庫新築 平屋建 75 坪)。

**【写真 1-2~3】**【参考写真 1-4】



【写真 1-3】

大滝集落、葭沢地区。旧万世大路(旧国道 13 号)。  
右側、木炭倉庫跡(鉄骨残骸)、米沢側(曲り角、  
左側赤岩道起点)を望む。  
奥の電柱箇所、佐藤武雄先生旧宅。 H290428



【参考写真 1-4】

葭沢地区木炭倉庫前、みんなが見守る中、炭俵の  
トラック積み込み。冬場の糧。

今回の探索記は、赤岩道について述べるのが目的ではないけれども、さらに若干補足しておきたい。明治 41 年発行の旧陸地測量部(国土地理院の前身)の 5 万分の 1 地形図を見ると、後の赤岩道起点となる「大滝・曲り角」付近から小径(幅 1m 未満、市町村道でもない)が、現赤岩道とほぼ同じ位置の大滝川右岸沿いに表示されている。小径は、古屋敷以奥の大滝川沿いになお進み葡萄沢山山頂近くまで続いている。一方、前にも若干触れているが、小径は古屋敷手前(水神様)で別れ、後の旧大笹生村大平地区を通過して松川まで(奥羽本線赤岩駅から福島側へ約 1.3 km 付近)進み、大笹生安養寺まで松川沿いに続いている(現在の市道安養寺大平線と思われる道路が別にある)。

なお、古屋敷から大滝川左支川の不動沢(旧中野村と旧大笹生村の村界)沿いに小径(後述の不動沢参道)の表示はない(1 万分の 1 地形図では、不動滝付近まで小径が記載されている)。大滝不動尊は、明治初期には開山されているので不動沢参道は既に存在していたと思われる。

### 〈奥羽南線の開通と災害・赤岩駅の設置と廃止〉

因みに、奥羽南線(福島～湯沢：のち奥羽本線)のうち福島～米沢間は、明治 32 年(1899 年)5 月 15 日に開通している。この南奥羽線は、明治 43 年 8 月の集中豪雨の地這り被害により赤岩駅の手前の 7 号隧道(第 1 赤岩隧道 L=536.5m)が被災を受け使用不能となり、奥羽線延長約 1km 区間が南側に移設されている。明治 44 年〔1911 年〕9 月の移設新線の再開通まで約 1 年間に要しており、その間 7 号隧道(当初は 6 号隧道)の手前福島側に仮乗降場を設置し赤岩駅との



間は徒歩で連絡したという。赤岩駅は開通時、赤岩信号場であったが、不通期間中の明治 43 年(1910 年)10 月 13 日赤岩駅に昇格している(『奥羽本線福島・米沢間概史』〔遠藤義朗 平成 13 年 1 月〕)。 【写真 2-1～3】

【写真 2-1】

第 7 号隧道(第一赤岩隧道 L=536.5m)M30.1 月完成。福島側坑口。東赤岩仮乗降場設置(M43.10.8～M44.9.4) M44.9 月廃止。坑門左上隅に“7”(号)の数字。 R021123



【写真 2-2】

第 7 号隧道崩落箇所(福島坑口から約 100m 付近)。  
M43.8 月被災時でなく後年の崩落か。R021123



【写真 2-3】

初代第 6 号隧道 L=110.6m〔初代第二松川隧道〕  
福島側坑口。東赤岩仮乗降場、最初に設置  
(M43.8.18~10.7)。M32(1899).5 月開業。M44.9 月廃止。

赤岩駅は平成 24 年(2012 年)12 月から冬期、平成 29 年 3 月 4 日からは通年通過駅となっていたが、令和 3 年(2021 年)3 月 12 日廃止された。前年の令和 2 年 11 月 23 日に駅に立ち寄った時には、駅構内の電光掲示板が落ち葉により遅れが出ていると表示していた。駅廃止は令和 3 年 1 月 21 日付け新聞報道で初めて知り、廃止発表後は駅への立ち入りが禁止となったので、この日駅に立ち寄れたのは偶然とはいえラッキーであった。

【写真 3-1~2】



【写真 3-1】

2020.11.23 現在の赤岩駅全景。当時全列車通過。  
電光掲示板は、落葉が原因で列車に遅れがあることを  
知らせていた。令和 3 年(2021 年)3 月 12 日廃止。



【写真 3-2】

旧スイッチバック引込み線跡と旧赤岩駅全景 福島側を  
望む(スイッチバック 1990 年 3 月 10 日廃止)。R021123

駅の廃止に関してメディアは、旧大笹生村大平集落との関連については報道していたが、関係の深かった旧大滝集落との関連について触れられていなかったのは残念である。かつての大滝集落にとって長い間、福島市内へ行くために一番便利な交通手段が、赤岩道を通って赤岩駅に出て奥羽本線を利用することであったという。赤岩駅は、通勤通学、買い物など生活手段としてよく利用されていたということである。

地形図の話しに戻るけれども次に、昭和 28 年発行の 5 万分の 1 地形図(国土地理院)を見てみると、「大平」が表示され(昭和 21 年、戦後の入植者により大平開拓組合設立。『福島の町と村』Ⅱ近現代編 304 頁)、前記の小径が大平地区で分かれ赤岩駅まで続いているように見える(途中切れている)。昭和 7 年に開設された赤岩道は、赤岩駅まで続くように表示されている

この小径のことであろう。すなわち、「曲がり角付近」→古屋敷（手前、大瀧水神様）→菱川→大平（旧大笹生村）→赤岩駅のルートと思われる。

【写真 3-3~4】



【写真 3-3】

古屋敷手前、残存徒歩道赤岩道(写真右側杉並木の所)の分岐箇所、とても狭く雑草が繁茂していれば道が分からないであろう。「大瀧水神(赤鳥居)」付近(起点から約 1.3km)。写真右側に不動沢参道が分かれる。



【写真 3-4】

大平集落内の赤岩道(想定)、カーブ箇所(赤岩駅への下り口)から大滝側を望む。R021123

## 2. 大滝不動尊と参詣道路・不動沢参道(木炭運搬路)について

探索ルートは、古屋敷で赤岩道から分かれ、大滝不動尊への参詣道路（仮称：不動沢参道 約 1.5km）に入る。

『わが大滝の記録』（PDF 版、39 頁）によると大滝不動尊について次のように述べている。

「大滝より南西へ大滝川に沿い山道を遡り、古屋敷(※注)を経て約 7km(筆者注: 実際片道 3.5km 程度)の上流に大滝の『お不動様』として、親しまれる滝あり、古くから霊験あらたかなるものありとして、近在の大笹生、中野福島方面はもとより、山形、宮城県方面からの信者、講中の参拝多し、滝の傍らに不動尊を祀る。」

【参考写真 2-1】【写真 3-5】



【参考写真 2-1】

往時(昭和 51 年)の大滝不動尊(建屋あり)と不動滝。  
『わが大滝の記録』より (カラー化)



【写真 3-5】

現在(令和 2 年)の大滝不動尊(建屋なし)と不動滝。

また、その大滝不動尊の由来について引き続き次のように記している。

「明治初期の頃、俵上人(笹谷谷地出身)によって開山されたもので、毎年早春(八十八夜)にお祭りありて、滝にうたれて行をする者、祈願をする者、又お籠もりをする者など行者信者で賑わう。」(傍点筆者、前掲書 PDF 版 41 頁)。

参道となる山道については、現在手入れが行き届いているとは云いがたいけれども、現地の不動尊自体は管理よく維持されている様子なので、現在も引き続き各種行事がおこなわれているのかもしれない。

その開山が、赤岩道の設置(昭和7年(1932年)9月)より以前なので、万世大路開通(明治14年〔1881年〕10月)前後には、既に大滝集落からの参道があったものと考えられる。

赤岩道開設後は、「大滝不動さまの参詣の通路でもあったので道標を立て、峠には丸木の腰掛けを備え、谷間の清水に金明水、銀明水などの立札を立て、小川の丸木橋を補修して山道の整備をはかり多くの参詣者の便利をはかった」(再掲、前掲書 PDF 版 30 頁)という。

往時の賑やかさが偲べれます。

**※注 古屋敷(ふるやしき)**

赤岩道起点から約 1.5km 進んだ所で不動滝に行く参道が分岐するその辺りを古屋敷(小字名)地区という。かつては畑もあり耕作されていたようである。現在廃屋があるが、これは伐採作業用の宿泊小屋である(大滝会談)。

### 〈大滝の炭焼きと木炭運搬路〉

関連の話題としてここで炭焼きとその搬出路の件についても若干触れておきたい。昭和 30 年代には、不動滝の上のブナ(樺)林でも炭焼きが盛んにおこなわれたそうである(通称地区名タキウエ)。生産され木炭の搬出路として使用するため、大滝不動尊の参詣道となっていた参道の整備(拡幅、木橋架設)を大滝集落の関係者の方々でおこなっている。古屋敷～不動滝までの参詣道路(仮称不動沢参道)をリヤカー(特製、炭俵運搬用)が通行可能となるように整備したという。それから赤岩道についても、徒歩道だったので所々を拡幅してリヤカーが通れるようにし、葭沢の木炭倉庫まで運んだということである。

余談であるが、このタキウエ地区では、ヒトデと思われる海洋生物の化石が産出しているのを紹介しておきます。(※注)

**【参考写真 2-2A~5】、【写真 1-3】参照**

**※注** 地質時代区分で「新第三紀中新世」(約 2,400~500 万年前)と呼ばれる時代の初期~中期にかけて日本海ができたそうである(地殻変動によりユーラシア大陸東縁の一部が分離して現在の日本列島のもととなったが沈下し海底となり日本海ができる)。その頃我々の日本列島(東北日本)は現在のように陸上ではなく、まだ海底にあったようで中新世後期にかけて海成堆積物が堆積していきこれが約 600 万年前に始まる地殻変動より徐々に隆起して陸地化し日本列島が形づけられたと云う。その海底堆積物が奥羽脊梁山脈・栗子峠を覆う新第三紀の岩質を形成しているということのようである。従って、栗子峠はかつて海底であったわけで、海の生物の化石が産出すると云うことになる。

(小池一之他共著『日本の地形 3 東北』東京大学出版会 2005 年 2 月、NHKBSP『ジオ・ジャパン~絶景列島に行く~第 4 集 北海道・東北編』2019 年 4 月等各シリーズなどを参考。)



**【参考写真 2-2A】**

通称「タキウエ」地区、不動滝上の炭窯小屋。  
木を焚いて窯を乾かしているところ。  
高野英治大滝会前副会長提供。(カラー化)





【参考写真 2-2B】

ヒトデと思われる化石。「タキウエ」地区産出。大滝会高野英治様所蔵。中新世の終わり頃(約 600 万年前)になると日本列島の地殻は海底から隆起し初め、ことに東北日本では奥羽脊梁山脈が出現。このタキウエ地区も古代には海底であったのであろう。



【参考写真 2-3】

大滝不動尊参詣道路(仮称不動沢参道)「木炭運搬路」の道普請、リヤカーが通れる道路へ改修(昭和 35 年頃)。大滝集落の皆様。木村義吉大滝会前会長提供。(カラー化)



【参考写真 2-4】

炭俵運搬用特製リヤカー(旧国道 13 号新沢橋付近、昭和 28 年 9 月)高野英治大滝会前副会長提供。(カラー化)



【参考写真 2-5】

冬期、炭窯小屋への通路確保(雪踏み)赤岩道から分岐した不動尊参詣道路(不動沢参道)。集団で実施、昭和 30 年代前半。木炭生産量ピーク、昭和 32 年 22,300 俵。左から我孫子晴夫・渡辺稔・渡辺正義・紺野兵蔵・須田和夫・後藤市太郎・渡辺角右衛門・榎木新吉・高野英治(敬称略)。大滝会榎木新吉様提供。

ところで木炭搬出路の造成状況等について大滝会木村義吉前会長は次のように記している。

「昭和 35 年ころから大滝木炭生産組合で労働条件の改善のため機械化を進めようとチェーンソー 3 台を購入した。また木炭を運ぶ手段でリヤカーを各戸で 1 台を備えた。リヤカーは標準より車幅を狭く特注で造り 10 俵(約 200 キログラム)ほど積み込んで不動様のあたりから木炭倉庫まで運んだ。その道作りで橋は立木を切って造り、唐鍬・ツルハシのこぎり・ナタを使用し、川原に木材や石を敷いてリヤカーを通した。

この運搬道路造り作業中の写真が残っている。場所は、古屋敷から不動滝に行く川沿いで鷹ノ巣山の下の川原(通称地区名ヒナサキ)であるが、現在は岩石が川に崩れ落ちて道は見られなくなっていると思われる。

【参考写真 2-3】参照

当時、組合で一括して山(雑木林)を営林署から払い下げ購入してタキウエ(筆者注:不動滝の上の通称地区名)の山で炭を焼いた。炭窯からは炭俵を背負って不動様まで下り、途中からリヤカーに載せ換えて運んだものである。」(木村会長手記より)

昭和 30 年代中頃以降には、不動滝のさらに上流の“幻の大滝”のすぐ下流の不動沢沿いでも炭焼が行われたという(後述)。そこで焼かれた炭についても、不動滝まで人肩運搬でおろされリヤカーで葭沢の木炭倉庫まで運んだということである。

なお、さらに昭和 30 年代後半には“幻の大滝”の上(峰を越えて北側)でも炭焼きが行われ、焼き上がった木炭は、山向いの旧国道 13 号(万世大路)のヘアピンカーブ箇所(通称ビューポイント、カエル岩の手前付近)まで索道により運搬したという。

**【写真 4-1~2】**



**【写真 4-1】**

写真奥の峰の裏、“幻の大滝”。峰手前「大滝ノ上」、その下炭俵運搬鉄索出発地。建物は東栗子トンネル福島側旧換気塔。写中央、イリモダ沢。 H300426



**【写真 4-2】**

旧国道 13 号、カエル岩(左側)附近からカーブ箇所(炭俵運搬鉄索終点)通称ビューポイントを望む。写真奥の山の峰裏が“幻の大滝”箇所。 H271122

それらの場所の炭窯へは、旧国道 13 号新沢橋付近から小川(左岸)に沿って作業用通路(山道)を造りながら、現在の東栗子トンネル福島側坑口の前(現在小川は溝渠〔暗渠〕)を通って行っておこなったそうで、小川の源流近くでは、段々に連なった見事な十三滝も見ることができたということである(十三滝については後日別途報告したい)。(高野英治・木村義吉さん談)

**【写真 5-1~3】[参考写真 2-6]**



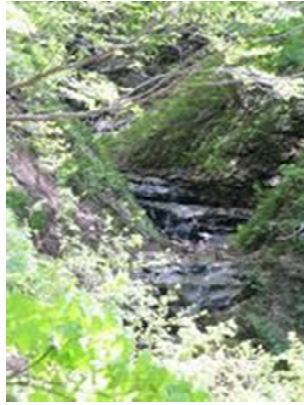
**【写真 5-1】**

旧国道 13 号新沢橋付近(「昭和の大改修」起点付近)東栗子トンネル福島側坑口方向を望む(左側三角山、その右側は葡萄沢山)。国道路側の防風林と山の間小川があり、炭焼きへ行く作業用通路・山道があった。道路は現国道 13 号。 R020119



**【写真 5-2】**

写真右上、林の奥東栗子トンネル福島側旧換気塔、その左側坑口ルーバー、その下小川の溝渠(アーチカルバート)。小川上流側より望む。 R030515  
[参考写真 2-6]はその溝渠施工中写真で下流側から撮影されたもの。



【写真 5-3】  
十三滝(小川源流) R030515



【参考写真 2-6】  
工事中の東栗子トンネル福島側坑口(写真中央上)。手前小川に設置された溝渠(暗渠、アーチカルバート)。小川下流側から望む。昭和 38 年 9 月頃。(カラー化)この箇所を通過して「大滝ノ上」「十三滝」方面の炭窯に向う。

小川源流の南側には、葡萄沢山(標高 967.3m)がありそのほぼその下を国道 13 号東栗子トンネルが走っている。東栗子トンネル(L=2,376m)は、工事名は栗子第 1 トンネルであったが当初の名称予定は「葡萄沢トンネル」であった。因みに西栗子トンネル(L=2,675m)は、工事名は栗子第 2 トンネルであったが当初の名称予定は「明神トンネル」(明神山〔峠〕のほぼ真下を走る)であった。(当時の福島工事事務所工事用パンフ「萬世大路」より)。 【写真 5-4~5】



【写真 5-4】  
写真右端の奥、葡萄沢山(967.3m)。左側建物、東栗子トンネル(L=2,376m)福島側坑口旧換気塔(現在廃止)。手前は坑口ルーバー(照明緩和区間)。右側建物、E13 新栗子トンネル換気塔。H300426 東栗子トンネルは葡萄沢山の下を通る。



【写真 5-5】  
明神山(940.7m、左)と東南に連なる山嶺。手前明神峠、このほぼ真下を西栗子トンネル(2675m)が通る。明神峠(850m)には、その名称の由来となった徳一上人(とくいつしょうにん)の伝説がある。徳一上人は、会津恵日寺(大同元年、806 年。空海帰朝の年。)や高畠町亀岡文殊(大同 2 年)の開基。 H241104

なお、木炭ができるまでについては、大滝会 HP『わが大滝の記録』(PDF 版)の他下記サイトでも紹介しているので、興味ある向きには参照して下さい。

「平成 28 年 第 11 回飯坂総合文化祭報告」

——解説編(古さと絵画、木炭生産、化石、縄文土器)——

<https://ootaki.xsrv.jp/11iizakabunkasai.pdf> (9 頁)

### 3. “幻の大滝”について

“大滝”については、『わが大滝の記録』（PDF版、39頁）に次のように記され、旧大滝集落名称の由来となったとしている。

「この滝（筆者注：不動滝のこと）の奥約3kmの上流、行きつきて沢果てるあたり突如として見上げるばかりの大滝が展<sup>ひ</sup>らける。高さ約30m その景観あたりをはらうものあり。

大滝の地名、正にこの滝に由来すると云う。早春雪消<sup>とど</sup>けの滝の景観は見事なりと伝えられる。

ただ、惜しむらくは、通常の水勢<sup>とほ</sup>しく僅<sup>わず</sup>かに岩肌を伝う数条の水、絶壁より滴<sup>した</sup>たり落ちるのみ、若しこの滝の水勢多ければ観光客などを集めたらんに、惜しきことなるべし。」

なお、この“大滝”の北側（上）の小字名は「大滝ノ上<sup>おおたきのうえ</sup>」となっており（『福島市史資料叢書第38輯 福島の小字』福島市教育委員会昭和58年3月、前掲書【中野村役場文書】〔中野村全図〕）、“大滝”の存在は昔から知られていてその名も“大滝”と呼ばれていたのであろう。

“大滝”について言及している他の文献は現在までのところ確認していない。

この“大滝”については、平成21年（2009年）6月7日に、大滝会木村義吉前会長ら4名が約50年ぶりに訪れている。当大滝会HP下記サイトにレポートがあるので参照されたい。今回（令和2年〔2020年〕10月）の“大滝”行きは関係者としては11年ぶりの訪問となる。

- 「お不動様（不動滝）とまぼろしの滝」（2009-6-7）

（木村義吉様・柁木新吉様・渡辺正義様・渡辺光義様）

<http://ootaki.xsrv.jp/page139.html>

また、その1年前平成21年11月2日には、関係者以外としては初めてといっても差し支えないと思われるが、「万世大路をこよなく愛する方々」が“大滝”を訪れている。これについても当大滝会HP下記サイトにレポートがあるので参照されたい。その中の一人「猫旅おばら様」のブログにも詳細報告があるので参照されたい。

- 「まぼろしの滝の存在を確認」（2008-11-3）

（山口屋散人様一行〔探索経路図面もあり〕）

<http://ootaki.xsrv.jp/page118.html>

- 大滝探索 2008.11.2（その1~3） 猫旅おばら様ブログ

[http://kanso.cside.com/neko\\_tabi/200811/ootaki01.htm](http://kanso.cside.com/neko_tabi/200811/ootaki01.htm)

おって、先に紹介した赤岩道については、当HP掲載の『わが大滝の記録』（PDF版24頁、31頁）及び猫旅おばら様ブログに詳しく紹介されています。

（『わが大滝の記録』PDF版、<http://ootaki.xsrv.jp/ootakipdf.html>）【赤岩道のHP】

- 「大滝⇄赤岩道探索」（2009-11-26）

猫旅おばら様ご一行（探索経路図面もあり）

<http://ootaki.xsrv.jp/page159.html>

- 赤岩道探索 2009.11.13（その1~2）猫旅おばら様ブログ

[http://kanso.cside.com/neko\\_tabi/200911/akaiwa01.htm](http://kanso.cside.com/neko_tabi/200911/akaiwa01.htm)

※本稿執筆に当っては上記の各サイトを参考にさせていただきました。御礼申し上げます。

## 第 2. “幻の大滝”を観る

### 1. 探索ルートの起点赤岩道から大滝不動尊・不動滝まで

前置きが少し長すぎたけれどもまず「大滝不動尊・不動滝」までのルートについて報告する。探索ルートの起点となる赤岩道入口（大滝・曲り角付近）を朝 9 時過ぎに出発する。赤岩道は、上り口起点から道幅も広く少し進むと大滝川の右岸沿いなる。しかしこれは、かつて人だけが通れる狭い幅員の徒歩道であったものを、戦後昭和 40 年前後改修し林道とした道路のようである。途中残存旧徒歩道を何カ所か見ることができる。現赤岩道には、民間観光施設「大滝宿」（昭和 57 年 6 月～10 年ほどで廃業）で設置したと思われる奇妙な標柱が立っている。

【写真 6-1～2】【写真 1-1】参照



【写真 6-1】

赤岩道入口（起点）。大滝集落通称「曲り角」付近。



【写真 6-2】

林道化された赤岩道。赤岩駅方向を望む。大滝川右岸沿い。旧観光施設「大滝宿」の奇妙な案内標柱が残る。

起点から何カ所かあるカーブの上り坂を 1.3 km ほど進むと、「大瀧水神」の額が掲げられている小さな赤い鳥居が左側に見え、右カーブになっている所に出る。その鳥居の向い側の路肩には清水がコンコンと湧き出していた。この鳥居の箇所は丁度沢筋になっており、鳥居の背面、向かって右側の方に山道のようなものが残っていて杉並木がある。これがかつての徒歩道赤岩道のようで、そのまま真っ直ぐ行けば菱川や大平を經由して奥羽本線赤岩駅（現在廃止）に向かうのであろう。その鳥居箇所から広い道路の方を右に曲がって 200m ほど進むと右側に杉林がありその少し先に林道が取付いている。大滝不動尊への参詣道である（仮称不動沢参道）。 【写真 6-3～4】



【写真 6-3】

（【写真 3-3】参照）

古屋敷手前、赤岩道（左）と不動沢参道（右）分岐点。写真中央に大瀧水神赤鳥居が見える。奥は旧赤岩道。



【写真 6-4】

大瀧水神赤鳥居付近から不動沢参道（林道化部分）を望む。右側木立の奥に作業宿泊小屋が見える。

前記注で記しているとおおり、その辺りが古屋敷地区である。その林道を入ると少し広い場所があり右側に廃屋が建っている。その廃屋は、かつて木材の伐採作業をするための宿泊小屋であるという。また、この辺りには畑もあったとのことである。

【写真 7-1】

さて、林道を進むとすぐに大滝川にぶつかる。川の中を横切って林道が通っている形になっている。また、すぐに大滝川左支川の不動沢があり、林道はまた横切って進む。この後林道は途中で左に分かれ沢沿いの山道

(不動沢参道)に入る。

【写真 7-2~4】



【写真 7-1】 不動沢参道入口付近、

不動尊方向を望む。右側作業宿泊小屋。奥に不動尊への案内標柱が見える。



【写真 7-2】

大滝川渡河、不動沢参道。不動尊方向を望む。  
左側に不動尊案内板。



【写真 7-3】

不動沢渡河、不動沢参道。不動尊方向を望む。



【写真 7-4】

二股、左側不動沢参道、すぐ狭くなり不動尊(不動滝)へ続く。  
右側森林作業道、すぐ先で終点。

この辺りの山道は比較的平坦で、不動沢支流沢の小滝などを眺めたり、不動沢の左岸や右岸に移ったりしながら進む。つまり所々で不動沢を横断して行くのである。途中、参道に岩が崩れ落ちているところや、沢沿いで道幅の狭い危険な場所もある。この辺りは国有林のようで、注意書きを表示している前橋営林局(現関東森林管理局)の表示板がブナの木に飲み込まれていた。

また、カーコの木（サワグルミ）の林も見ることができる。カーコの木はまっすぐで柔らかく製材しやすいので利用価値が高いそうである。

**【写真 8-1～6】**



**【写真 8-1】**

不動沢支流の小滝。



**【写真 8-2】**

沢沿いの急崖にある参道は人ひとり歩く幅もないほどで危険。不動沢上流を望む。



**【写真 8-3】**

参道上の落石。



**【写真 8-4】**

不動沢右岸へ渡河する。



**【写真 8-5】**

カーコの木（サワグルミ）の林。  
現地で大工さんが製材し修行小屋を建てた。



**【写真 8-6】**

ブナの木に飲み込まれる前橋営林局（現関東森林管理局）の注意看板。手前に境界杭が見える。

山の奥に入るにつれて不動沢も谷間が若干深くなって来る。そして、歩き始めて1時間半ほどで、当該不動沢参道の最大の難所と云われる谷間に到着した。かつてここには小さな橋が架かっていたそうで、不動滝の上で生産した木炭（炭俵）をリヤカーに積みその橋を渡って運んだということである。橋は、幅 1.5m 程度、長さは 4~5m 程度であったようで、何本かの丸太を渡し板や丸木を敷いたということである。前記の通り大滝の製炭関係者により設置されたものである（大滝会木村前会長等談）。

【写真 9-1~3】



【写真 9-1】

山が深くになるにつれ谷間が深くなって来る。木橋跡下流、磨崖仏群のような渓谷の急崖。



【写真 9-2】

磨崖仏群のような急崖上流側にある奇妙なまんまる玉石 2 個。



【写真 9-3】

不動沢参道木橋跡(立木箇所)、上流左岸側から望む。木橋:L=4~5m、W=1.5m 程度。丸太を渡し板等を敷く。



【写真 9-4】

中央石積、修行小屋跡。カーコの木(サウグルミ)を現地で大工さんが製材し小屋を建てたという。

その谷間を渡り対岸（右岸）を上って行く。するとすぐに立派な石積（野面石積）が左側に見えてきて、その上は少し広い平場となっている。ここには戦後暫くの間（昭和 30 年代初め～昭和 50 年代初め）、修行者のための建物修業小屋が建っていたそうである。修業小屋は、カーコの木を伐採し現地で大工さんが製材して建てたという（前掲者等談）。

【写真 9-4】

修業小屋跡の前を通り不動沢の方へ下りて行くと、左手前方に大滝不動尊のお籠もり堂（用途不詳の小屋、筆者による仮称）が見えてくる。また、地形の関係で見えなかった不動滝が眼前に見えてきた。午前 10 時半過ぎに到着（起点から約 3.5 km）、不動沢を挟んで正面に見事な不動滝を見る。この不動滝の落差は 10m くらいであろうか。2 度目ではあったがやはり感激する。

【写真 10-1~5B】





【写真 10-1】

修行小屋跡付近から、不動沢右支川(沢)合流点を望む。右上の小屋はお籠もり堂。写真中央の左支川(沢)に丸木橋があったが消滅していた。右側から流入しているのは不動沢本川(不動滝流末)。



【写真 10-2】

不動沢対岸(右岸)から不動滝が見えてくる。上が不動滝、下は不動滝滝壺下流の流末(不動沢本川)。



【写真 10-3】 不動滝滝壺下流の流末(不動沢本川)。

上が不動滝。



【写真 10-4】 不動滝。不動沢対岸より望む。



【写真 10-5A】 不動滝全景 正面から望む。

左側大滝不動尊



【写真 10-5B】 不動滝全景 参道から望む。

左側大滝不動尊

(〔参考写真 3-2〕 とほぼ同一構図)

不動滝の方へは、支流の沢を渡って行くが、以前は丸木橋があったが見当らず、沢に下りて渡った。対岸には、カツラ（桂）の木の大きな木がある。そこから参道になっていて、先には石段があり上り詰めたところ、滝のすぐ脇に不動尊が鎮座しておられる。かつては、この不動尊には上屋があったようである（『わが大滝の記録』PDF版41頁【参考写真2-1】参照）。しかし現在は無い。

さて、不動滝には20分ほど滞在して、10時50分“幻の大滝”へ向けて出発した。

【写真10-6～9】 【参考写真3-1～2:おば様提供写真】



【写真10-6】  
左側支流を渡ると参道があり奥の不動尊まで続いている。  
右側は神木を思わせるカツラの木の大きな木。



【写真10-7】  
大滝不動尊。



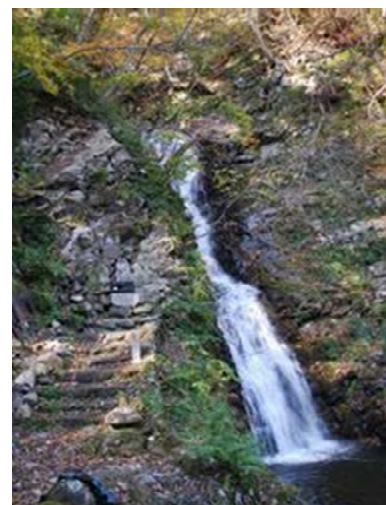
【写真10-8】  
お籠もり堂。これの奥に炭焼用作業通路・山道。



【写真10-9】  
カツラの木の大きな木。



【参考写真3-1】 12年前の不動滝 H20(2008)11.02  
左側お籠もり堂 おば様提供



【参考写真3-2】 12年前の不動滝 H20(2008)11.02  
左側大滝不動尊 おば様提供

## 2. “幻の大滝”は遠かった 不動滝(大滝不動尊)から“幻の大滝”まで

国土地理院の地形図には記載されていないけれども、森林管理局の「国有林野計画図」(「第5次国有林野施業実施計画図」〔平成26年度樹立〕関東森林管理局福島森林管理署)には「森林歩道」葡萄沢線として不動沢沿いに葡萄沢山に至る小径が記載されている。今回の探索ルートは、その葡萄沢線とほぼ同一ルートと思われるが、旧大滝集落の炭焼製炭者によれば、それらの山道は炭窯に行くために自ら造った作業用通路だという(前述の不動沢参道・木炭運搬路参照)。いずれにしても、その山道が炭焼用として使用されなくなって数十年が経過していて、道の面影が残っているところは少ない。

さて、“大滝”へ行くためには不動滝の上の不動沢上流へ出なければならない。そのためには、不動滝を回り込んで峰筋を越えていく必要がある。不動滝(大滝不動尊)の西側にお籠もり堂があってその奥の沢沿いに人ひとりやっと通れる程度の炭焼用作業通路と思われる山道がありそれを上る。途中はつきりしないところもあり、崩れている所もあったが急斜面を30分程歩いて峰筋に出ると道が明瞭に残っていて下方に不動沢を見ることができた。 **【写真 11-1~4】**



**【写真 11-1】**

お籠もり堂背後の炭焼用山道入口を望む。  
(森林歩道:葡萄沢線か)  
写真左側大滝不動尊参道入口のカツラの大木。



**【写真 11-2】**

不動沢右支川の沢。合流点から望む。  
不動滝の上流側には、写真右側の急斜面の山道を  
上り峰筋に出る。



**【写真 11-3】**

大滝不動尊・不動滝から炭焼用作業通路の面影を  
残す山道(森林歩道葡萄沢線か)を上る。  
左側は、不動沢右支川の沢(【写真 11-2】参照)



**【写真 11-4】**

峰筋に到着、かつての炭焼用山道と思われるものが  
残っている。

峰筋から不動沢へ下りたが小さい沢が丁度流れ込んでいる所であった。そこから 200mほど下流が不動滝になると思われる。ここからは、不動沢の河原でなく、沢岸（左岸）に上がって少し進み河原へ再び下りたが小さな段々滝があって広い水面（滝壺）ができていた。この辺りから沢の勾配が少し急になってきたように見えたが沢の中を進む。ほどなくして左側から比較的大きな沢・支流（右支川）が合流するところに出た（不動滝から約 50 分、約 0.7km 地点）。

**【写真 12-1～6】**



**【写真 12-1】**

不動沢に下りる。右側から小さい沢が合流していた。



**【写真 12-2】**

下りた地点から下流側を望む。この 200m ほど下流に不動滝がある。



**【写真 12-3】**

小さな段々滝と広い水面（滝壺）。



**【写真 12-4】**

段々小滝上流から望む。沢勾配が少し急になる。



**【写真 12-5】**

比較的大きな支流が左側から合流（右支川）。



**【写真 12-6】**

合流点付近から不動沢本川下流を望む。  
この後沢岸へ上る。不動滝から約 50 分 (0.7km) 地点。

ここからは、向って左側の沢岸（右岸）に上がって進み 20 分程してまた沢の中へ戻り進んだ。少し行ったところで右側（左岸）に最初の炭窯の跡を発見した（不動滝から約 1 時間 20 分、約 1.1km 地点）。

【写真 12-7~8】【参考写真 4-1】



【写真 12-7】

沢岸から戻り不動沢本川を上る。



【写真 12-8】

最初の炭窯跡（木村家）。  
カーコの木と思われるものが倒れて朽ちていた。  
下流側から望む。【参考写真 4-1】参照。



【参考写真 4-1】

12 年前の炭窯跡（木村家）。窯跡のカーコの木（サワグルミ）の大木が健在。H20（2008）11.02 撮影。おば様提供  
（【写真 12-8】参照）

この炭窯が後日、前大滝会長木村義吉家のものであることが判明した。因みに後に出てくる約 0.5km 上流の炭窯跡は前大滝会副会長高野英治家のものであることが判明しており、何れもご本人に確認しているものである（赤岩道起点付近からは 5km 程度の所）。炭焼きは、不動沢沿いで実施され前にも触れているが、昭和 30 年代前半は「タキウエ」と通称する不動滝（大滝不動尊）のじき上で行われていた。しかし原木資源が枯渇するに従い上流側へ移動して行ったようで、当該炭窯は昭和 30 年代中半のものということである。これら炭焼き事情については大滝集落史『わが大滝の記録』に次の様に記されている（PDF 版、傍点筆者）。

「大滝の生計のもととは国有林から払下げをうけた原木を焼いて製炭することである…」(24 頁)

「炭焼き稼業は重労働で炭のように真っ黒くなって汗を流しての力仕事であった。自宅から 8km・10km と離れた山奥の現場まで歩いて行くため、日の出前に家を出るのは常であった。現場では原木を伐採し、約 1.6m の長さに切り、窯場に集材する。太い原木は斧で 2 つ割・4 つ割にする。細い木は 10 本内外を一束たばねにして、一日掛りかまで窯一基分の原木を準備する。」(25 頁)

「冬山は比較的自宅から近い 4~5km のところで炭を焼いたが、一度伐採した樹木は 30 年、40 年過ぎないと再び用材とならないので、年とともに炭焼きの現場を奥山に求めるほかなく、次第に山に泊まり込みで働くのが常態となっていった。」(25 頁)

〔かまぶち〕

「炭焼きする石窯造りのことである。夏山・冬山と称して年 2 回、国有林の原木を払下げ、山分けが決まると、各家が一基ずつの石窯を築いた。炭窯の構築には親類縁者、隣同志の 5、6 人が助け合って共同作業で行われた。

窯は石と赤土で構築されるが、窯が出来た夜は、窯主の家では、その家の主婦が得意とする手料理と酒が出されてお祝いをする習わしであった。」(30 頁)

【参考写真 4-2】[参考写真 2-2A 参照]



【参考写真 4-2】

かまぶち(炭窯づくり)状況。手前両側に積んであるのが窯の口石。奥の小さい長方形の空間はクド(煙だし)。大滝会副会長高野英治様提供

この木村家炭窯跡から沢の中を 2、30 分進んだ所に、比較的大きな沢・支流(右支川)が左から合流していた。事前の情報では、左からの多分この沢だと我々は思っていたのだが、これから先 3、40 分程度で“大滝”に着くはずである。時刻は 12 時半を過ぎていてけれども遅くとも 1 時過ぎには到着できるであろう。前進のタイムリミットは午後 2 時だ。

今の季節山の中では夕方 4 時になれば暗くなり始める。山道は危険で遅くとも 4 時までには赤岩道に戻らなければならない。ところが左側の沢というのは、実はもう一つ上流にもあることが後で分かった。

さて、その合流点から 10 分ほど進んだところで二目の炭窯跡を右側に発見した。前述の通りこれも後日確認されたものであるが高野家の炭窯跡である。木村家炭窯跡から 0.5km 程(約 40 分)の所であった。木村前会長・高野前副会長によれば、炭焼きは冬期においてもおこなわれ、“大滝”へは仕事の合間を見て時々見に行くこともあったという。

【写真 13-1~5】



【写真 13-2】

写真 13-1 と同一箇所から下流側を望む。小滝がある。



【写真 13-1】

木村家窯跡を後に上流へ進む。



【写真 13-3】

左側からの大きな支川(ここから 3、40 分との情報)。木村家窯と高野家窯の中間付近。



【写真 13-4】

合流点から少し進む。高野家炭窯跡付近を望む。



【写真 13-5】

奥の炭窯跡（高野家）。木村家から 0.5km ほど上流。

高野家炭窯跡に着いたのは、12 時 45 分頃であったが昼食を取るのは、とにかく“大滝”を確認してからにしようということで進むこととした。沢もだんだん深くなり途中には小滝などあって危険な場所もあり沢岸に上がる場合もある。そのような時に「ナメコ」や珍しい植物等に遭遇することもあった。これらの紹介は、他のものも含め巻末にまとめて記す。

高野家炭窯跡から小一時間、0.5km ほど進んだ辺りからは沢の勾配も一段ときつくなり始めたが、そこでカツラ（桂）の巨木に遭遇した。直径は 2.5m 以上、高さも 20m 以上はあるのではないかと思われた。樹齡は見当もつかないが 200 年くらいは経っているのではあるまいか。

この巨木から少し進んだところで時刻は 13 時半となった。先の左側の支流合流点からは 1 時間以上経過している。3、40 分で“大滝”が見えてくるはずだが影も形もない。引き返すことも考えなければならない時刻であるが、とにかくタイムリミットの午後 2 時までは前進してみようということで沢を上る。沢の流水もかなり少なくなり『わが大滝の記録』のいうところの「行きつきて沢果てるあたり突如として見上げるばかりの大滝が展らける。」の一文を思い出す。

【写真 14-1~6】



【写真 14-1】

高野家炭窯付近から不動沢上流を望む。



【写真 14-2】

小さな滝あり。危険を避け、沢岸山側を進む。



【写真 14-3】

天然ナメコに遭遇。



【写真 14-4】

沢の勾配がきつくなってくる。左側(右岸)にカツラの木の巨木が見える(【写真 14-5】参照)。ここから右岸側(写真左側)に渡る。高野家炭窯跡から約 40 分。



【写真 14-5】

右岸のカツラの巨木。直径 2.5m 以上(ピッケル長さ約 1m)。



【写真 14-6】

“大滝”未だ見えず。左側支流から約 1 時間(午後 1 時半)、引き返すべきか否か、判断のしどころ。

### 〈“幻の大滝”見ゆ〉

その場所から少し進んだところで左側に沢(支流)があるのが見えてきた。先の情報の、左の沢から 3、40 分というのはもしかしてこの沢を指していたのかも知れない。

更に数分前進したところで微かに滝の音が聞こえてきた。“大滝”の近いことを実感した。紅葉の木々の間に滝の流れを漸く見る事ができた。更に前進、“大滝”の全体が見えてきたとき確かに見上げるばかりのその雄大さに感激した。『わが大滝の記録』のいうように水量は少ないけれども、落差 30m と伝えられる高さからの流れは見るものを圧倒、その雄姿は脳裏から消え去ることはないであろう。歩測などでも見当が付けられる距離とは違い高さの見当はつけづらいけれども、40m 程度はあるのではないかと筆者には思われた。



“大滝”の下に到着したのはタイムリミットギリギリの午後2時前であった（距離約6km）。  
ゆっくり“大滝”を堪能したとまでは言えないけれども、あちこちから“大滝”を眺めてみたり、遅い昼食も滝の雄大な流れを見ながら済ませたりと暫し至福の時を過ごした。沢水で喉を潤してみただけでも少し甘みがあるように感じられこの上もない美味であった。

30分ほどの滞在では名残惜しく、午後2時10分過ぎ帰路につく。

【写真 15-1~5】



【写真 15-1】

最後の左側支流・沢(右支川)。  
午後1時35分、ここから3,40分だったのか。



【写真 15-2】

最後の左側支流・沢から数分、滝の音が微かに聞こえ、  
滝水の流れを紅葉のまにまに僅かに望む。



【写真 15-3】

圧巻、“幻の大滝”の全貌。

「行きてきて沢果てるあたり突如として見上げるばかりの大滝が展<sup>ひ</sup>らける。」

(『わが大滝の記録』(PDF版、39頁、斎藤源右衛門様記)



【写真 15-4】

見よ、あれが“幻の“大滝”だ。

ようやく到着。13時45分。

(約6km、5時間弱)



【写真 15-5B】

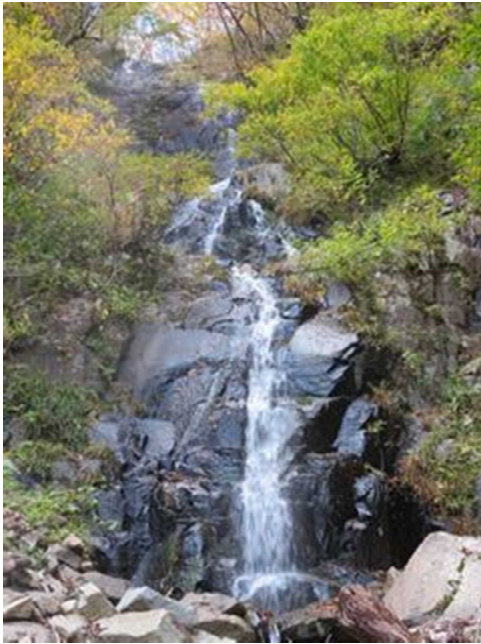
“大滝”流末の不動沢。沢果てる辺り。  
沢水は表面を僅かにしか流れていない。  
手のひらに受けて喉を潤す。美味なり。



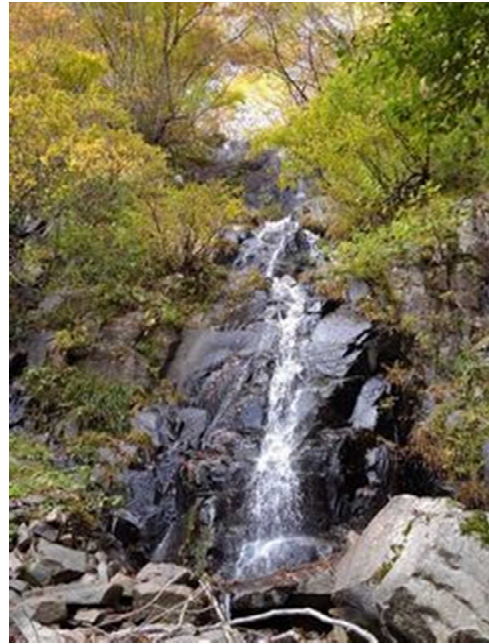
【写真 15-5A】 昼食を取りながら眺めた“大滝”。

## “幻の大滝”百景

(【写真 16-1~4】【写真 17-1~10】 【参考写真 5-1~2】 :おばら様提供)



【写真 16-1】 “幻の「大滝」”(高さ約 40mはあるのでは)。



【写真 16-2】 “幻の大滝” 齋藤正美会長提供。



【写真 16-3】 “幻の「大滝」”



【写真 16-4】 “幻の大滝”



【写真 17 -1】 “大滝”滝頭。

ピンクに染まった水の塊からほとぼしる滝水。



【写真 17 -2】 最上段



【写真 17 -3】 中段(1)



【写真 17 -4】 中段(2)



【写真 17 -5】 中段(3)



【写真 17 -6】 下段(1)



【写真 17 -7】 下段(2)



【写真 17 -8】 最下段



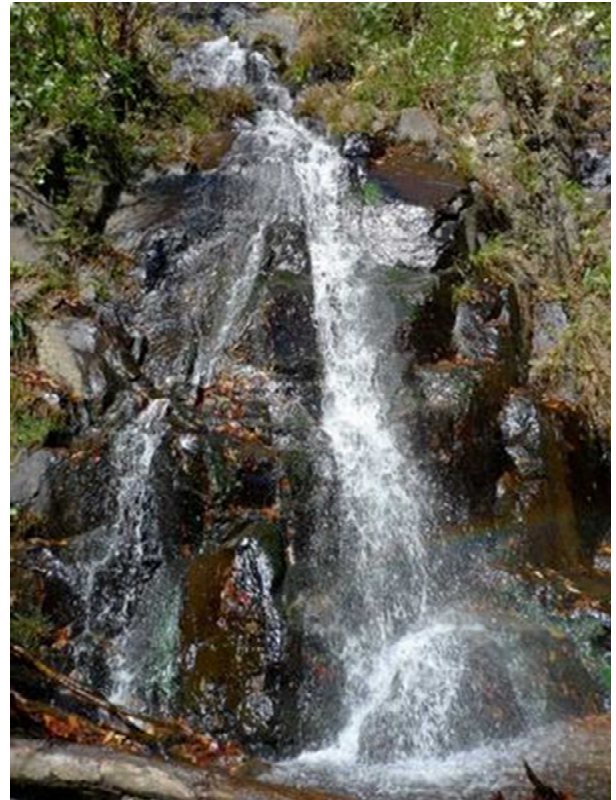
【写真 17 -9】 滝壺全景



【写真 17 -10】 下段  
〔参考写真 5-2 〕とほぼ同一構図。  
R02 (2020) 10.27



〔参考写真 5-1 〕  
“幻の大滝” 12 年前、H20(2008)11.02。  
おばら様提供



〔参考写真 5-2 〕  
“幻の大滝” 12 年前、H20(2008)11. 02。下段。  
おばら様提供

## キノコ等について

この度の“幻の大滝”の見学では“大滝”を観ることが目的であることは云うまでもないけれども、その途中では多くのキノコ類や珍しい植物などに遭遇しました。ここに稿を改めてそれ

らの一部を紹介し、今回の探索行がより充実したものであったことを付記しておきたい。

今回の山深い探索ルートでは早くも晩秋の佇まいを見せキノコが真っ盛りであった。本来ならば、この素晴らしい山の恵みを楽しむ山の神様に感謝するところである。しかし福島県内（会津地方の一部を除く）においてはすべての「野生きのこ」について放射性セシウム濃度(※注)が基準値を超えているため出荷制限品となっている。出荷制限とは販売することは勿論無償で他人に譲り渡すことも含まれている。（「きのこ、山菜類のモニタリングと出荷制限品目・市町村について」〔福島県林業振興課〕HP、R3.7.30 閲覧確認）。

キノコについて、厚生労働省が示した放射性セシウム濃度の基準値は100Bq/kg（1キロ当たり100 ベクレル）であるが福島県のモニタリング検査ではこれを超えているものがあるという。したがって、家庭内消費まで規制されているものではないが、「野生きのこ」の採取は事実上できないということになるだろう（山菜類は種類により出荷制限地域は異なるが「コシアブラ」等は「野生きのこ」とほぼ同様である）。

**※注** 2011年（平成23年）3月11日の東北地方太平洋沖地震（三陸沖〔震央地名〕の太平洋を震源〔深さ24km〕として発生した超巨大地震、マグニチュード9.0、最大震度7、原子力事故を含む各種被害を総合して「東日本大震災」と称する）において、東京電力福島第一原子力発電所（所在地：福島県大熊町・双葉町）が津波に襲われ、全電源を喪失原子炉建屋の水素爆発や原子炉のメルトダウンを起こすなど最悪の原子力事故が発生し大量の放射能が空気中に放出された。このため、放射能汚染が海・田畑山林など福島県内の広範囲に亘り甚大な被害を齎し今なお続いている。この事故は、原子力事故の評価レベル7（最悪）とされる。（参考：気象庁HP、NHKHP 特設サイト等）

ところで我々が今回の探索ルート上で確認したキノコはほとんどが食菌（食用キノコ）と思われ、遭遇順にホコリタケ（ケムダシキノコ、若いものが食用）、ヤマドリモダシ（クリタケ）、天然ナメコ、ムキタケ（酷似する猛毒のツキヨタケは芯に黒いシミ・発光性あり識別可）、ヌメリスギタケ、ブナハリタケ（推定）、オリミキ（ナラタケ）等である。 **【写真 18-1~8】**



**【写真 18-1】**  
ホコリタケ(ケムダシキノコ)  
若い内食用。



**【写真 18-2】** ヤマドリモダシ(クリタケ)



**【写真 18-3】** 天然ナメコ



**【写真 18-4】** ムキタケ(食用)。酷似する毒キノコのツキヨタケは芯に黒いシミ、発光性あり。



**【写真 18-5】** ヌメリスギタケ



【写真 18 -6】 ブナハリタケと思われる。【写真 18 -7】 オリミキ(ナラタケ) 【写真 18 -8】 名称不詳

余談となるけれども、上記のキノコの中で筆者が採取し食べたことのあるものはヤマドリモダシ (クリタケ)・ナメコ・オリミキの 3 種類だけである。ホコリタケ等他の 4 種は図鑑 (清水大典他共著『原色きのこ』 社団法人家の光教会 昭和 54 年 9 月) で食菌とされているが、筆者は採取したことも食べたこともない。

この内傘の裏が針状になっているブナハリタケ (推定) はブナの倒木に生えているようである。これに似た感じのものに「スギカノコ (スギヒラタケ)」(【参考写真 6】) というものがあるが、ヒダ (傘の裏) が刃状である。上記図鑑でもスギカノコは食菌とされ、昔油炒めか何かで食べて

いた記憶があるけれども、平成 16 年以降に食後急性脳症を発症し死亡する事例が (2004 年 [平成 16 年] 10 月 31 日付け新聞「福島民報」など) 確認され非食とされている (「スギヒラタケは食べないで」農林水産省消費・安全局農産安全管理課 HP、R3.7.30 閲覧確認、「自然毒のリスク



プロフィール: キノコ: スギヒラタケ」厚生労働省 HP、R3.7.30 閲覧確認)。いずれにしても、大部分の福島県内において「野生きのこ」は前記の通り放射能汚染により現在採取できない状況にあるが、いずれにしても自分が

【参考写真 6】 スギカノコ(不食)  
福島市土湯・畳山地蔵尊付近。H301007

食べたことのあるキノコだけを採取し分からないキノコは絶対に食べないことが肝要である。なお、探索ルート上では、キノコの他にも珍しい植物類や山菜類があったので幾つか紹介しておきたい。テンナンショウ (天南星) の仲間、ツルシキミの赤い実、ワサビ等である。また、溪流の王者といわれ用心深く動きの速いイワナの手掴みには驚いた。昔取った杵柄だそうであるが数十年ぶりの手掴みとのことであった。

【写真19-1~5】



【写真 19-1】  
テンナンショウ(天南星)の仲間



【写真 19-2】  
ツルシキミの赤い実



【写真 19-3】  
ワサビ(山葵)



【写真 19-4】

名人芸、イワナの手掴み。この後放流。



【写真 19-5】

左側不動沢河原の奇妙な石コロと右側“幻の大滝”滝壺の石。

イワナについては、阿武隈川（信夫ダムの下流〔支流を含む〕）の出荷制限（H24.4.5）が継続していると思われる。不動沢は、阿武隈川水系である。（「内水面の採捕・出荷制限等の措置一覧」〔令和3年1月28日現在〕福島県庁HP、ふくしま復興ステーション、R3.7.30閲覧確認）

## おわりに

帰路は、明るいうちに古屋敷（赤岩道）までには着こうということでとにかく急いで下った。往路は朝9時過ぎスタート、約4時間40分（約6km）かかったけれども、帰路は3時間10分で戻っています。

目的地“幻の大滝”を午後2時過ぎに折り返し出発、古屋敷（赤岩道）までの山道約4.5kmを2時間40分で下り（往路では4時間10分かかった）午後4時50分頃に到着、辺りはかなり暗くなってきていたがギリギリのところまで山道を抜ける。出発地の大滝「曲り角」には、それから約30分（約1.5km）で下り午後5時20分頃漸く戻った。日はとっぷりと暮れ辺りは真っ暗になっていて、遙か遠く国道13号を走る車のライトがそこから明るく見えたものである。

赤岩道では、齋藤会長のスマホの灯りで下った。筆者は、疲れで足がもつれ何度も転倒、その都度齋藤会長に起こして貰うという体たらくでご迷惑をおかけしました。ご案内頂いた齋藤会長には御礼申し上げます。

本稿のとりまとめに当たっては、大滝会木村義吉前会長・高野英治前副会長・榎木新吉前役員の皆様には貴重な写真・資料の提供を賜り、また面倒な質問に何度も快く応じて頂きました。これらがなければ本稿の執筆はなしえなかったでしょう。おばら様には貴重な写真を提供して頂きました。皆様には心から感謝申し上げます。

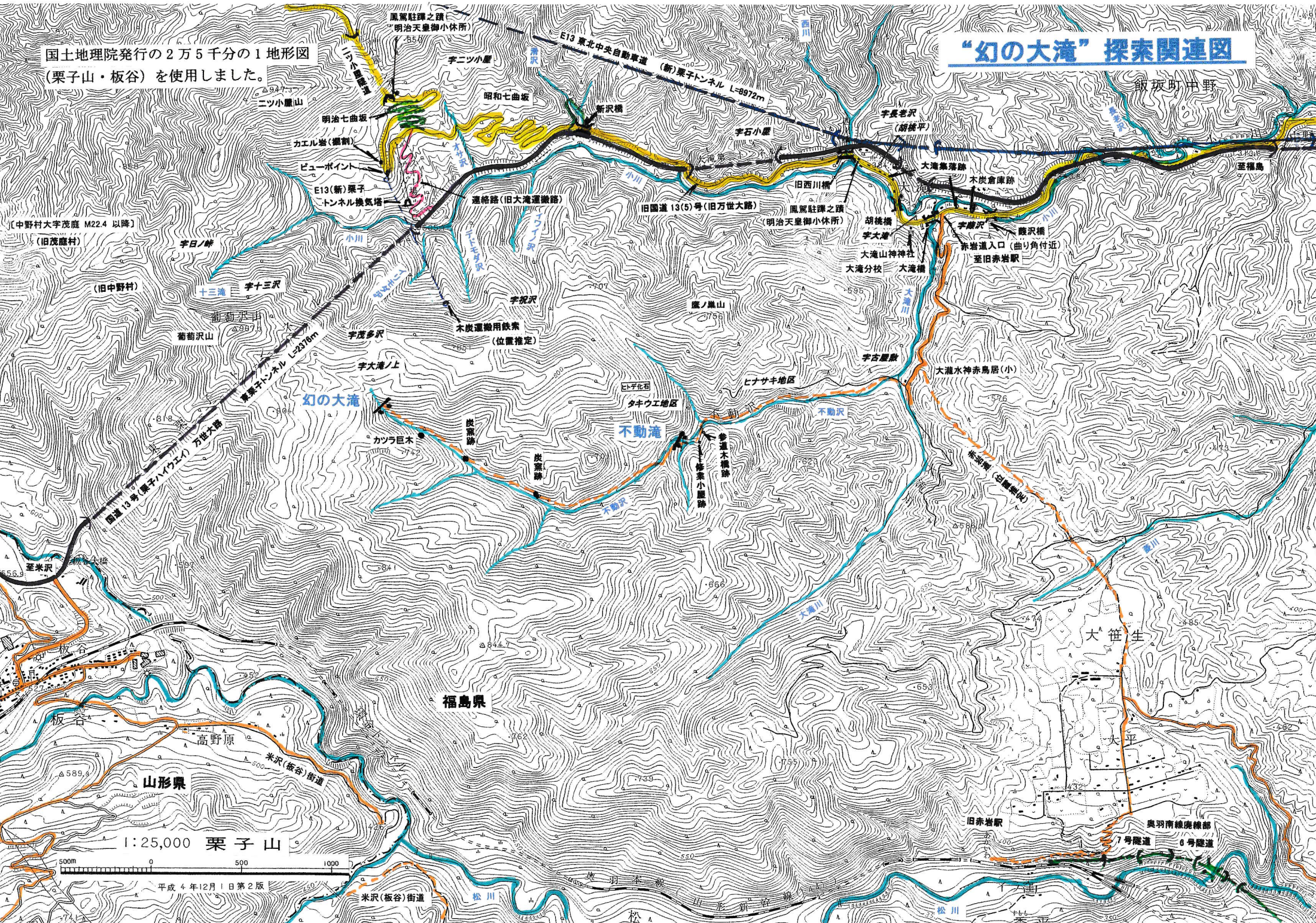
今回は、遠距離長時間の山道ということで足の痛みや疲れが数日にわたり残ったけれども、大滝集落の名前の謂れと伝えられるあの雄大な“幻の大滝”を目の当たりにすることができ天候にも恵まれて素晴らしい一日となりました。二度と行けないかも知れぬ“大滝”の見学はこの上ない貴重な体験となっています。

ホームページ掲載に当たり大滝会HP管理人紺野文英様に世話になりました。御礼申し上げます。



国土地理院発行の2万5千分の1地形図  
(栗子山・板谷)を使用しました。

# “幻の大滝”探索関連図



【中野村大字茂庭 M22.4以降】  
(旧茂庭村)

(旧中野村)

国道10号(栗子・イワズ) 万世大路  
E13(新)栗子  
トンネル換気塔

幻の大滝

不動滝

福島県

山形県

1:25,000 栗子山

平成4年12月1日第2版

